

二つの海・二人の女性——石牟礼道子『苦海浄土』と李男熙^{イナムヒ}『海からの長い別れ』

寺下浩徳 立命館大学・院

本発表は、1950年代に日本の南九州で起きた水俣病事件を取り上げた石牟礼道子(1927-)の作品『苦海浄土』(1969)と、韓国南東部の都市である蔚山広域市温山地域にある工業団地において、工場排水・排煙が原因で起きた温山病事件を描いた李男熙(1958-)の作品『海からの長い別れ』(1991)を比較し、両作品の共通点と相違点を考察する。

□ 両作品の共通性

取り上げる両作品は、作品の発表年度に数十年の開きがあるが、作品の主題やその文学史上の意義などにおいて数多くの共通点がある。まず1点目、両作品は、第2次世界大戦後の日韓両社会において、公害というのが社会問題化しはじめた初期に、それを主題として描き出した先駆性がある。石牟礼に関しては、1956年に公式確認される水俣病に対して、水俣病が「公害」であるという認識が定着する以前に、「奇病」として忌避されていた時期から取り上げ、『苦海浄土』の原型となる作品を地方文芸誌に発表していた。他方、李男熙に関しては、1985年1月の新聞報道をとおして全国的に社会問題化した温山病事件に対して、87年頃から創作活動をとおして関わった。この両者の取り組みは、石牟礼が事件発生当時から現在まで水俣病事件と同時並行的に、それを主題に一貫して創作活動を行っているのに対して、李男熙は、「温山病」が全国的に社会問題化した後に当該作品の主題としてのみ関わったのであり、両者の姿勢を同一視することはできない。しかし視点を変えて、両作品を両国の文学史上の文脈に置き換えたとき、環境問題をテーマに創作したという両者の取り組みは、文学史上、極めて先駆的な意義があったといえる。

2点目に、両作品の社会的な意義である。先に述べたが、環境問題をテーマに創作した両者の創作活動を作品世界の構成に関係付けるならば、それは、女性表現者が女性の登場人物を作品の中心人物に据えて描く構図になっている。その構図を社会史的な文脈に置き換えたとき、『苦海浄土』の原型となる作品は、1960年代初頭の執筆であったが、女性表現者が女性を主人公にして「社会問題」を語り出すということが、当時の日本社会の時代制約のなかで、現在のように容易なものではなかった点に留意しなければならない。同時に、韓国社会においても1987年の民主化宣言以後、文壇において女性の創作活動が増えるわけであるが、民主化以後の社会においていち早く、女性表現者が女性を主人公にして「社会問題」を取り上げ、社会批判を行ったということにある困難を見過すことはできない。つまり、今改めて読むときに、その当時の時代状況において両者の創作活動に共通したであろう「語る」困難をまず理解することは欠かすことができないだろう。

□ 両作品の相違点

まず、両作品の文学史的・社会史的意義における共通性を指摘した。次に、両作品の相違点を見ていく。まず1点目に両作品の作品世界の構成である。それは、石牟礼の『苦海浄土』が作者と同一視可能な語り手「私」を登場させ、一人称で水俣の地域社会を描いている一方、李男熙の『海からの長い別れ』は三人称客観小説の図式で、作者と同一視不可能な李ヘユンという女性の主人公を設定し、舞台もタンハン(地名)、またはO市といった形で、温山病事件の当地とは直接的な関係性を明示していない。この違いは、ルポルタージュ的性格が強い『苦海浄土』は、作者自身も作品世界に批判的に晒しだすという点において、加害企業であるチッソの告発だけに限定されない多面的な批判の次元を確立したといえるかもしれない。しかし『海からの長い別れ』に関しては、三人称の構図によって、語り手の立場性は作品内に表れず、主人公である李ヘユンも温山病事件の「被害者」としてのみ描かれ、語り手とは厳密に区別されている。もちろんこのことは、一人称がよいのか、それとも三人称かという二分法の議論に収斂するものではない。しかし、『苦海浄土』は、水俣病事件の直接の当事者ではない「私」を登場させたことによって、読者を作品内の「私」という存在に代入可能にし、水俣の現場性と読者にある現場性を接続可能なものにしたことは評価しなければならない。他方、『海からの長い別れ』に関しては、語り手と登場人物たちのそれぞれの立場性が分断的に固定され、公害の被害や実像を読者は、「外部」から読むという形になったことは否めない。

□ 共通点・相違点を越えて浮かび上がる両作品のつながり

前節までで、両作品の共通点と相違点を確認した。そのうえで、今回、両作品を比較対照したのは理由がある。それは、『苦海浄土』から20数年を経て出版される『海からの長い別れ』に関して、その作品世界で描かれる「日本」表象には、『苦海浄土』以後の20年の両国間の関係性が刻み込まれているからである。具体的には、『海からの長い別れ』が取り上げる温山病事件の原因企業に、日本企業が直接的な合弁や、間接的な技術提供など多様な形で関わっていた事実を作品は描き出している。以下の引用は、作品の主な登場人物であり、当該地域であるタンハン出身の金キョンテクが、タンハンと離れた場所で、知り合いの紹介によって会ったシン・ミスという女子学生に、自分も知らなかった事実を告げられる場面である。

“もうそこ(工業団地—引用者)で竣工し、稼動しているハンイル鉍業のような工場は、公害がどれほど酷かったからなのか、日本から追い出され、韓国に移ってきたと聞いたのだけ。そして、日本でも公害企業を第三世界に輸出することは非道徳的だとして、韓国に移転させないようにデモをしたという話もあるし。”(82頁12行目)

次の引用は、排水を出す原因企業であるハンイル鉍業の住民対策協力部の崔部長が、先の引用に取り上げた金キョンテクの父でもあり地域住民の代表的役割を担っている金パンスル氏に会い、会社側の立場を述べつつ、補償対策の具体化を引き伸ばそうとする際の発言である。

“(会社に関する説明—引用者)それに加えて、この会社の所有者は韓国人だけでなく日本の会社にも持分があるということです。そちらから技術や機械を導入しましたので、そのために、日本の人々にも今回の事件を伝える資料がなければいけませんし。”(113頁17行目)

2箇所引用したが、以上の内容は、公害事件の起きた工業団地の原因企業に少なからず日本企業の関係性があることを示すものである。しかし、この事実関係を温山病事件という特定の出来事だけで考えることはできない。それは、1965年の日韓基本条約以後の日韓関係史において、政財界の有力者が集まる日韓協力委員会で述べられた矢次一夫の「矢次試案」に代表されるように、韓国経済に日本の西日本地域の経済圏を接続して一大経済圏を作るという構想のもと、韓国に対する投資が当時の日本社会で盛んであった事実もある。またその過程とは一方で、1975年前後の日本化学のクロム輸出事件に代表されるように、水俣病事件以後、環境行政の厳しくなった日本社会から高濃度汚染型の化学工業を韓国に移転していたという背後関係にも重なる。つまり、李男熙の『海からの長い別れ』が問いただしたものは、韓国の公害という国内的な環境問題だけではなく、日韓の両国間において再演されつつあった、植民地なき新しい植民地主義ともいえる問題だったのである。そうしたときに、『苦海浄土』と『海からの長い別れ』という両国の文学作品は、「環境文学」という枠組みに加えて、「新植民地主義」という新しい視点から改めて問わなければならないだろう。

§ 『苦海浄土』 作品紹介

『苦海浄土』は3部構成であり、出版順序が逆になるが、本発表で取り上げた第1部『苦海浄土—わが水俣病』(1969)のほか、第3部『天の魚』(1974)、第2部『神々の村』(2004)がある。水俣市が舞台であり、水俣病事件に関して、原因企業であるチッソと地域社会の様子を「私」が書きとめる回想小説になっている。主婦であった「私」は水俣病者の釜鶴松を病室で「見てしまう」ことから、水俣病事件に関わるようになったことが述べられる。

§ 水俣病事件

水俣病とは新日本窒素水俣工場の排水が原因の有機水銀中毒である。症状は感覚障害、視野狭窄、言語障害などさまざまである。公式確認は1956年であるが、政府が公害と認めたのは1968年だった。その間、排水による水銀汚染の事実認定はもとより、その補償をめぐる患者たちに厳しい差別が続いた。公に認定された水俣病患者は1万2000人前後いるが、その認定が政治的なものであったことはいまでもない。1995年に政府は「最終解決案」を出し、一律260万円の金銭を中心にした問題解決を行ったが、その謝罪や責任の問題をめぐるまだ多くの課題が残っている。

§ 『海からの長い別れ』 作品紹介

タンハン(地名)を舞台に、そこで自己形成期を過ごし現在、20歳前後の女性である李ヘユンと、それほど年の離れていない年上の男性の金キョンテクが主人公である。作品内の時間経過としては、高校卒業後、タンハンや「公害」ということばを避けて、違う地域で暮らしていたヘユンのもとに、キョンテクから一通のはがきが送られてくる。そのはがきをきっかけに、ヘユンは故郷であるタンハンでの生活を回想する。その回想をとおして、海産物に恵まれ、人々がみな親和的に暮らしていたタンハンの風土や海が、工業団地が地域にできることで、分断され、工場排水・排煙のために「死の海」になっていく過程が描かれる。

§ 温山病事件

1978年ごろから本格的に移動する蔚山^{ウルサン}広域市温山^{オンサン}地域の工業団地から出る工場排水・排煙が原因の複合汚染である。単独企業によるものではないために、原因特定が難しい。症状としては、神経・感覚系疾患、呼吸器疾患、皮膚疾患などがある。現在も政府は公害病として認めていない。補償対策として当該地域に住む37000

人前後の人々に対する政府支援による移住が考えられたが、政府の予算確保が難しく1988年までに20%が行われただけだった。また、同時に支給される移住補償費が低額なため、住民が移住を放棄するなど、計画そのものが実現不可能に陥っている状況である。

参考文献

石牟礼道子『苦海浄土ーわが水俣病』、講談社、1969年

李男熙『海からの長い別れ』(原題: 바다로부터의 긴 이별)、プルビ(풀빛)、1991年、ソウル

金丁昂「韓国の蔚山・温山工業団地における多国籍企業活動の環境的側面」、『公害研究』、21巻、岩波書店、1991年、15-26頁

두도완『한국 환경운동의 사회학』、文学と知性社、1996年、ソウル

(具度完『韓国環境運動の社会学』石坂浩一・福島みのり訳、法政大学出版局、2001年)

鄭徳秀「蔚山・温山公害被害住民移住対策事業」、『環境と公害』、25巻、岩波書店、1995年、52-58頁

平山隆貞「日本化学による韓国への公害輸出(1)ー(6)」、『月刊総評』、日本労働組合総評議会、1975年12月号-1976年7月号、110-115、63-69、70-75、94-100、76-81頁